

動作模倣の獲得過程における「動作-音声」同時提示の効果

○田口典子

高浜浩二

(作新学院大学大学院附属臨床心理センター) (作新学院大学大学院心理学研究科)

KEY WORDS: レスポンドタイプ手続き 動作模倣 自閉症

【問題と目的】

言語の獲得の過程において、視覚刺激と音声刺激とが同時に提示され、刺激の時間的、空間的近接性のみで刺激間の関係が成立することがある。これをレスポンドタイプ手続きと呼ぶ。菅佐原(2009)は、成人 25 名に対し、レスポンドタイプ手続きを用いた訓練により刺激間関係が獲得されるかどうかを検討した結果、7 名の参加者に派生的な刺激間関係が成立したことを報告している。また派生関係の生起の差異について、刺激間関係獲得の背景に発達的な過程が関与していることを示唆している。さらに、読み仮名に対応する文字刺激と漢字刺激を対象にレスポンドタイプ手続きによる訓練を行い、読み仮名音声に対する漢字書字反応への転移を報告している。このようなメカニズムを応用することによって、漢字以外の学習においても効率的な指導が可能になると考えられる。そこで、重度の知的障害を伴う自閉症児に対して、動作模倣を指導する過程において、動作と音声を同時提示するレスポンドタイプ手続きを用いた。その結果、指導者の動作という視覚刺激と実際動作の関係のみならば、同時提示する音声刺激と実際動作の間でも派生的な刺激間関係が成立するかどうかを検討した。

【方法】

(1)参加児: 自閉症・知的障害の診断を受けている年中男児。CA4 歳 8 カ月時の田中ビネー-V では、MA が 1 歳 6 カ月 (IQ32) であった。言語によるコミュニケーションは不可能であった。発語は「やだ」「かして」「はい」「いくよ」の 4 語程度で機能的ではなかった。色-色や形-形など視覚的な情報があれば、同一見本合わせは可能であった。ABC や 1 桁の数字などの記号が好きで記号に対応した音声表出は可能であった。**(2)場面設定と期間:** 大学院附属臨床心理センターで週 1 度、1 回につき 1 時間の指導を受けていた。その中の 15 分程度を動作模倣の時間にあてた。動作模倣は、201X 年 3 月~201X +1 年 5 月に行った。**(3)手続きくベースライン(BL):** 指導者と参加児が向かい合っってイスに着席し実施した。指導者の「動作-音声」の同時提示に対して、それに対応する動作を求めた。例えば、指導者が両手を左右に広げる動作を示すと同時に「ひこうき」という音声を同時提示し、それに対して、参加児は両手を左右に広げる動作の生起が求められた。提示した動作は「両手を左右に広げる(ひこうき)」「両手を頭にのせる(あたま)」の 2 動作で、各動作 2 試行、計 4 試行で 1 ブロックとした。**＜トレーニング(TR)＞:** BL 同様に実施した。動作ができた場合には、くすぐりなどの身体強化による賞賛を行った。動作ができない場合は、補助指導者が参加児の後ろからガイダンスを行った。**＜転移テスト＞:** 指導者の「音声」の提示に対して、それに対応する動作を求めた。**(4)従属変数:** 指導

者の「動作-音声」の同時提示、あるいは「音声」の提示に対して、参加児が対応する動作をガイダンスなしで生起した場合を正反応とした。

【結果】

BL では指導者の動作と音声の同時提示でも、参加児は動作模倣ができなかった。TR では徐々に動作模倣ができるようになった。さらに、動作模倣獲得後の転移テストでは、指導者の音声のみ提示で音声と一致した動作ができた。

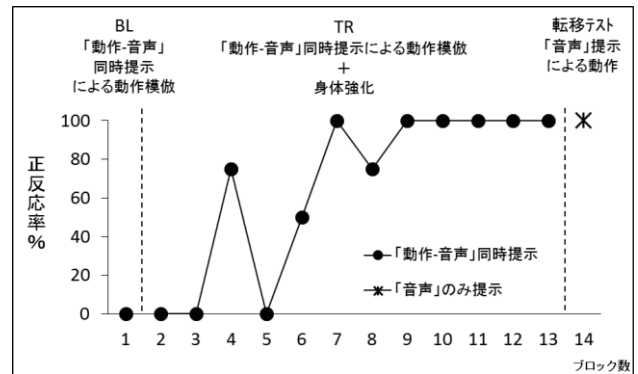


図 1 標的動作における正反応率の推移

【考察】

重度の知的障害を伴う自閉症児に対して、動作模倣を指導する過程において、動作と音声を同時提示するレスポンドタイプ手続きを用いた訓練を行った。その結果、動作と音声の同時提示で対応する動作ができるようになった。これらは、提示された動作に対し、同じ動作をした場合に身体強化を随伴させることで動作模倣を獲得できたと考えられる。次に、動作模倣獲得後の転移テストでは音声のみ提示で対応する動作ができるようになった。これらのことから、言語の獲得にも派生的な刺激間関係が成立されることがわかった。参加児は、アルファベットと読みの関係といった視覚刺激と音声刺激の刺激関係を既に学習しており、指導者の動作(視覚刺激)と指示(音声刺激)の両方に注目が生起しやすかった可能性がある。その結果、動作と音声の刺激間で等価な関係が形成されたと考えられる。この結果は、菅佐原(2009)の指摘を支持するものである。

しかしながら、発達の過程や学習履歴によっては刺激の同時提示だけでは等価関係を形成できないこともあり、刺激間関係の学習の成立に必要な条件を明らかにしていく必要がある。

【引用文献】

- 浅野俊夫・山本淳一(2001)『ことばと行動—言語の基礎から臨床まで—』ブレン出版。
- 菅佐原洋(2009)「読み・書き・理解の学習過程に関する行動分析学的研究」慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要. 249 - 259.

(TAGUCHI Noriko, TAKAHAMA Kohji)